

## 平成25年度 県新規採用職員基礎研修 知事講話（4月4日）

（平井知事） 皆さん、こんにちは。

先程は一緒に記念写真を撮りましたけども、外で写真を撮るかどうかっていうのは結構違いがございまして、天気がいいときはこういう具合にしている伝統があります。あのときの写真屋さんね、このときばかりはとということで、道路の上にカメラを置いてやる。私ら役人ですと、「道路法上の許可を取っているのかな」と、またいろいろ考えるわけですが、そんなような職業病のような考え方もありますけども、本当に今日は清々しい、いい天気だと思います。皆さんも鳥取の県庁の方へ就職を決められて、先般、講堂の方で入庁式をさせていただきました。率直な印象を申し上げて、ほんとにフレッシュな人材が鳥取県庁、それから関係団体に入って来たなという印象を持ちました。期待をしておりますので、伸び伸びと思う存分皆さんの人生を謳歌し、その謳歌する中で周りの人たちを幸せにさせていただければありがたいなというふうに思います。最初の導入の話ですから肩の力はぜひ抜いていただいて、楽に聞いてもらえばなというふうに思います。今日もこのような陽気でございますけども、いろいろ今新入生の季節でして、ちょうど鳥取環境大学の入学式も今日やってきたところでもあります。まさにそんな日和なのかなというふうに思います。

そうしますと、入学式の会場が梨花ホール、とりぎん文化会館というのがあります。鳥取県内の方だけでないと思うんですね、この度こちらの鳥取のほうに来られた方もいらっしゃるんですけど、とりぎん文化会館というものがあるんですね。前は県民文化会館と言ったんですけども、スポンサー手法を取りまして財源不足を補おうと、スポンサーを得てですね、年間1千万とか、そういうスポンサー料を貰いまして、それでネーミングライツっていうんですけども、命名権を譲り渡すわけです。それで、とりぎん文化会館という名前にしたんです。そしたら東京から来る人なんかはびっくりするんですね。銀座に「鳥ぎん」という焼鳥屋さんがあるんです。「焼鳥屋がついに鳥取で、なんとまあホールを買ったのか」という誤解をされるようなことがございまして、そんなとりぎん文化会館なんですけども、その前にちょうど入学式を称えるかのようにね、あそこに二十世紀梨の花が植えてあるんですよ。ご存知ですかね。この二十世紀梨が鳥取県のシンボルのような花で、ちょうどこう花盛りであります。

二十世紀梨っていうのは、本当はとっても弱い品種なんです。なぜかと言いますと病気に弱いんですね。脆弱なんです。実はこれ、松戸という千葉県のごみ溜めというんですけど、そういうところで見つかったって言うんです。この新しい梨は二十世紀、当時は19世紀の終わりだったものですから、来るべき20世紀には日本の代表品種になるだろう、そんな願いを込めて二十世紀梨っていう名前をつけたんです。確かにちょうど鶯色の、緑色の綺麗な色になりますし、食べてみますとシャリシャリとした感じがあってクリスピーなそういう味わいがあります。甘味はそんなに強くはないんですけども、そこそこありまして、秋の味覚として相応しいようなものでございます。ただ、この二十世紀梨を100年前に鳥取県に持って来たんですけども、なかなか苦労したんですね。それは黒斑病っていう言わばカビが生えるような病気がありまして、それになり

ますと黒くなってしまって売れなくなるんです。それはこの品種の最大の欠点なんです。ただ、頑張ってますね、梨農家をやると家を潰すって言われた時期もあったんです、戦前なんかは。だけど、この梨でやってみようということで鳥取県は一生懸命やって来た。県民の皆さんはやって来たんですね。その成果として二十世紀梨が鳥取県の代表選手のように、代名詞のようになりました。これは日本の歴史の中でも珍しいと思うんですけども、産学官の連携の賜物なんです。鳥取大学という大学があります。今取り壊しをすとかしないとかと言って大騒ぎになっていまして、三洋という大きな会社がありました。鳥取三洋という会社を開きまして、当地で工場を開きました。たくさんの雇用もありましてね、言わば、三洋城下町のようにして、この県庁所在地は発達してきたという歴史もありました。

残念ながらこの度パナソニックと統合して、少し先行きが分からなくなって来た訳であります。そんなような状況になって、今その土地を売らなければならない。昔からあるので大学の跡がございます。これは鳥取高等農業学校というものでございまして、「少年よ、大志を抱け、Boys, be ambitious」あの札幌と同じように山陰に造られたわけです。当時これはまだ珍しかったですね。それを誘致運動をしまして造ったっていうプライドもあります。それで、これを鳥取高農の歴史の中で二十世紀梨をサポートするっていうことを、ずっとやって来たんです。それで、農業指導をしましてね、「こういうふうになれば黒斑病に強いよ」とかいうことをやってきました。また、受粉ということをやりますね、二十世紀梨はそのままでは実が出来ないんです。人工交配って言うんですけども、人工授粉をしまして、それで初めて実がなるようになる。人手がかかるんですね。放っておいても実がなるもんじゃない。そのように、難しさがあります。それを行政もそうですし、それから学者さんたちもそうですし、農家の皆さんもそうです。皆で力を合わせて100年かけて二十世紀梨を鳥取県の品種に仕立て上げて来たんです。

何が言いたいかといいますと、鳥取というのは小さな県です。58万切るくらいの人口になりました。4月1日でおそらく58万切っちゃったと思うんですね。そういう日本一小さな県だけでも、日本一小さな県だから一番力がないかという、絶対そうじゃないと思うんです。それは小さなコミュニティだからこそ、さっき申し上げましたように、学者さんだとか、あるいは行政のスタッフだとか、農家の皆さん、こうした人たちがみんな顔が分かる関係なんですね。大学のあの先生、お世話になっています。こんなことがあったら農業改良普及所の何々さんに頼めばいいとか、そのままみんな見えるんですよ。お医者さん何かもそうですし、それから商売やっている人もそうですし、みんな1つのコミュニティの中で、お互い分かりあえているというのは強みだと思うんです。ちっちゃいからって、皆揃っている。確かに1人ひとりのパワーはちっちゃいかもしれませんが、それを上手くつなぎ合わせてくれば絆が生まれて、顔が見えるネットワークが成熟をしてくれば鳥取県なんて東京や大阪に負けることはないじゃないかと、このように思います。その辺が唯一ですね、我々のチャンス、勝機だと思うんです。そんな意味でこれからは住民の皆さんとか、企業だとか、団体だとか、あるいは大学だとかですね、そういうところのネットワークを上手く作れるかどうか、県庁の中にこもっているんじゃなくて打って出ようということを申しあげましたけれども、そういうことをやれるかどうか鳥取県が今後の時代を勝ち取れるか、あるいは敗れ去ってしまうかという分かれ目だというふうに思います。ぜひ、皆さんにも、そん

なことをこれから役所人生の中で学んでいただき実現をしていただきたいなあというふうに思います。

今日は、せっかく皆さんがこうやって集まられて、これから同期の仲間になります。一生を通じた仲間になると思います。これから研修も始まりまして、いろいろと講義もあると思うんですけども、お互いの絆をね、せっかくですから深め合ってもらいたいなあと思います。時間を2時頃まで今日はいただいていますので、まず皆さんが「鳥取県に入ってきてこういうことをやりたくて入った」そんな思い、あるいは「こんなことをこういうふうにしたら鳥取県がよくなるんじゃないかなあ」とかね、あるいは皆さんの仕事の領域のことで結構ですけども、「こんなことをやってみたい」というようなことがあると思うんです。その辺を少し、何人かお話を聞かせていただきたいと思います。全部になると時間がなくなりますので、またこれからレクリエーション等ゆっくりとした時間もあると思います。じゃあ、ランダムにいきたいと思いますが、それでは水産試験場の竹内さん、いらっしゃいますか。

**(水産試験場：竹内航海士)** 水産試験場の方に勤務になりました竹内です。いきなりで非常に困っていますけど、

**(知事)** どこかで前職あったんですかね。

**(竹内)** そうですね、民間の企業で6年間ほど東京の方で働いておりました。

**(知事)** どんなことをされていて、鳥取県庁に思いを抱かれたんですか。

**(竹内)** まず、学校を卒業した時点でも募集がありまして、水産試験場の枠になると思うんですが、まず外を見てから鳥取県に何か持ち帰ろうと思ひまして、それで民間の方に一応就職をしまして、修行というかたちがあつているか分からないですけど、修行を積むようなかたちで何か持って帰るという、持って帰ろうかなあと思って民間の方に就職しました。それで、この度、水産試験場の方で募集がございまして、こちらの方に応募させていただきました。

**(知事)** 何をやってみたいというか、どういう順番でしたいとか。

**(竹内)** 実際の業務内容というのをあまり詳しく把握してないのですが、私もやっぱり水産試験場の方で水産資源というものを主に取扱うようになると思うんですけど、これを私たちのあと、その子どもたちとその他のかたがたに残していくのが1つの資源かなあと思っています。

**(知事)** はい、ありがとうございます。別にこれはもう皆さん試験は終わっていますから、今さらどうこうということはありませんから安心してしゃべっていただければと思います。原子力安全対策課の村上さんっていらっしゃいますか。

**(原子力安全対策課：村上主事)** はい。原子力安全対策課、村上です。当たるかなあという気はちょっとしていたので、ちょっと考えていたんですが、いざマイクを持つとすでに頭が真っ白になって何も思いつかないのですが、私は前職、また他県で原子力、都市大学の方で原子力工学科を卒業しましたので今回その原子力関係で原子力安全対策課に配属になっております。それで、前職によりまして他県で原子力の防災についての業務に就いておりました。それで、業務内容について言いますと、防災から少し離れた原子力発電所の安全対策、どういう安全対策をしているかチェックするとか、例えば検査、除染検査とはちょっと違うかもしれませんが、そういったものの絡みの仕事をしているということになります。そういった原発に今絡む、大学のときに原子

力発電所、また大学院の方でもちょっと関連していましたので、そういう関連の仕事をしたいということで今ここに至っております。

(知事) はい、ありがとうございます。それでは、教育委員会の林さん。

(教育委員会高等学校課：林主事) すいません、当たると思わなくてびっくりしております。私の方は、前職の方はいろいろありまして主にアルバイトで民間の方をいろいろと転々としておりました。先月まで半年間スポーツ健康教育課の方で非常勤でお世話になっておりました。そこで、尊敬する職員さんたちと素晴らしい出会いがありまして、そういう環境でまた一緒に働くことで自分を磨かせていただきたい、自分を磨いていきたいと思ひ、こちらで働かせていただきたいと応募しました。4月1日から高等学校課の方で勤務しております。職務の方は主に予算執行の方で、県の予算の確保、まだシステムの方を把握していないのですが、国費、県費、それ以外と、いろいろシステムがあるようで頑張っ頭詰めに詰め込まないといけないと思ひているんですが、それと、教育委員会の先生がたのサポートになるような仕事をしたいと思ひております。それ以外に高校生のまんが応援団の担当をしております。それで、コーディネーターさんと一緒に企画を考えて、高校生のサポートをしていきたいと思ひております。

(知事) はい、ありがとうございました。そうしますと、ひとかた、西の方、西部総合事務所福祉保健局の佐々木さん、いらっしゃいますか。

(西部総合事務所福祉保健局：佐々木主事) はい。

(知事) どうぞ座ってください。

(佐々木) 西部総合事務所福祉保健局に勤務しています佐々木です。私が志望したのは、松葉杖をついているのもっと福祉の方に関われたらなと思ひて志望しました。初めての就職、新卒なので周りの皆さんがたが大人なので、すごく、すごく人生を見せていただくように、先輩がたと一緒ですごく緊張をしているんですけど、でも、自分の仕事を一生懸命頑張っいき、福祉の方にももっと深く関わられたらなと思ひます。

(知事) はい、ありがとうございました。今4人のかたから率直な声が聞けたと思ひます。

竹内さんの方では、東京の方で仕事をしていた。そういう中で水産ということで航海士として県庁を目指そうというふうに移身を決められたということでした。そして水産資源、これ大切なんですね。鳥取県はちょうど海の境目があるんです。日本海流という寒流がありまして、あとは南の方が対馬海流が入ってくる。その潮目にあるもんですから、いろんな魚が回遊しているわけでありまして、水産資源も豊富なところなんです。それを次の世代、次の世代へと受け継いでいくのが私たちの使命ではないか、このようなお話がありました。また、村上さんの方では、大学そして大学院にも行かれたということですが、原子力発電ということをお勉強されておられた。あるいはちょうど原子力安全が主になりまして、私たちが非常に関心を持っている、地域の重要事項でもあります。全国的にもそうでありまして、福島原発の事故が起きた後、これはどうやって安心できる体制を作るのかなということなんです。鳥取県は、今駆け出しでして、始まったばかりなんですね。今までは周辺地域で立地ということ、原発のあるところは大事にされているんですが、周りのことはあんまり考えがなく置いてきぼりになっていたと。それを急ピッチで追い上げようとしておまして、そういうところでこれまで勉強してきたこととか、経験、資格等役立てたい

と、こういうお話で原子力安全というものを考えていくと、こんな話が聞けました。

林さんは、アルバイトをされたりして社会経験も積まれる中で、教育に携わる人たちの何か、すばらしい人脈とかを感じていたと。自分もその一員になってみたいなのということが、きっかけだったそうでありました。

まんが王国づくりというのを実はやっけていまして、子どもたちもまんが描くのが好きなんですね。去年は、鳥取県は「まんが王国」を建国をしたんです、「まんが王国」これは水木しげる先生という先生がいて、ご存じですよ、ゲゲゲの鬼太郎で有名です。今それが境港の方でまちを作ったんですね、たくさんブロンズ像が並んでいます。なんせ鳥取県は自然が豊かで食べ物も美味しいですし、人間も優しいもんですから妖怪も多いんですよ。人間が減って妖怪がだんだん増えるような気がいたしますが、先般、水木先生が来られまして、それで米子鬼太郎空港という新しい空港を作ったんですよ。元々米子空港って言ったんですけども、鬼太郎という名前を入れたんです。世の中にはJ・F・ケネディ空港だとか、高知龍馬空港だとか、そういうように人の名前を入れた空港って世界中いっぱいあるんですけども、妖怪の名前を入れるのは初めてなんです。そういう世界で初めての妖怪の名前が入った空港になりましたら、夜中丑三つ時となると一反木綿が降りて来るようになりました、これ嘘ですけどね、そんなようなことですが、それで呼んだんですね、そうしたら水木先生、大変張り切られて米子鬼太郎空港という題字も先生書かれたんですよ、プロダクションの中、当時テレビドラマの名残もあった頃でありましたけども、その中にもう書初めのようにあっちこっちに、米子鬼太郎空港って書きまくったそうでございます。大変に張り切られました。

先生をぜひ開港式、空港を開くときに来てもらおうということでご招待申しあげましてね、それで来てもらったんです。そしたらやっぱりあの先生すごいですよね、今年でもう91歳になられると思いますが、この水木先生、空港に出られましてマスコミの皆さんからマイクを向けられます。「先生、米子鬼太郎空港開港良かったですね、御感想があればぜひ教えてください」って言って、インタビューを受けられるわけです。そしたら水木先生は「米子鬼太郎空港を作ろうなんて鳥取県も面白いことを考えますなあ、だいたいこの世に妖怪なんていないんですから」なんて水木先生は言わないでほしい。それで一生食ってきたんじゃないか。そういうようなことでこれジョークなんです。先生、一流のジョークなんですけど、本当に人間より妖怪に近づいているんですけど。そんな水木先生だとかね、青山剛昌先生という名探偵コナンの作者がいたりしますし、ついこの近所には、谷口ジロー先生という、これも有名な、世界的有名な漫画家がいる。こんなことで「まんが王国」づくりをしようと思いはじめました。高校生が今、応援団を作ろうとまんがの本なんかを出したりしまして、去年あたりも出版をしたりしておりました。そんなような子どもたちが元気になることだとか、学校の先生たちもサポートしたり、この辺が林さんの目標として今考えておられるところだというお話がありました。

また佐々木さん、われわれの仲間ですけども、松葉杖をつけておられるということもあって、福祉という世界をぜひ元気にしたいと、そんな仕事がしてみたいということで、初めての就職先として鳥取県庁である、今福祉の事務所に入るということになりました。このようにいろいろと志があって、皆さんこの鳥取県庁に入ってきています。それぞれに沿革と言いますか、引っ下げ

てきたバックボーンがあると思います。それぞれの思いがあるわけですね。それで、県庁という就職先を選んだときの思い、これをぜひ大切にしてもらいたいと思うんです。私自身のことから言いますと、私、今この商売をしています、元は皆さんの仲間でありまして国家公務員の方なんですが、鳥取県ではなくて東京の方の公務員になりました。自治省という、今はない役所です。総務省って現在は言っています、そちらの方に就職をしました。本当は公務員になんかなりたくなかったです。何でかという、これはテレビドラマのイメージですかね、先日も「SP」というドラマやっていましたね、フジテレビ系列で、こっちはTSKでやっています、家内が見ているので横で見ておりましたら、何かステレオタイプに出てくるような公務員が出ていましたわ、中央官僚がワインなんかを飲みながら、日本を占領してやろうと、我がものにしようなんてことを企んでいる、あり得ないんですけどね。だいたいワインなんか高くて買えません。そのようなわけで、我々の方ではいろんな思いがあるんですけども、そういうイメージがあったんですね、霞ヶ関なんか行ったらゴルフなんか休みの日にして、賄賂なんかもらって悪いことばかりしているんじゃないかと。そんなようなことになるよりは、どちらかと言うと、もっと人の役に立つようなことをやってみたいなというぐらいな思いだったですね。

だから、馬鹿にして公務員なんかという思いがあったんです。だけど、実は公務員試験って皆さんもそうですけども、受験料タダじゃないですかね。他の資格試験ってお金かかるんですよ。それで、模擬試験のつもりで公務員試験を受けたんですね、そうしたら通っちゃって、それで通ったんですけども、行くつもりもないし、放っていたら友だちから電話がかかってきて、「お前馬鹿かと、面白いからちょっと官庁回りしてみろ」って言われたんですね。国家公務員、我々とちょっとスタイルが違っていて、それぞれの会社が就職先であって、省庁がですね、会社のような就職先でそこが採用してくれないと採用されないというシステムなんです。ですから、そういうところを回りまして気にいってもらったら、その役所の公務員になるというシステムなんです。それで、皆、額に汗かきながら夏の暑いときに行って、慣れない背広を着まして回るわけですね、学生が。それを年中行事のようにやっていました。私も行って見まして、そのときに、厚生労働省、これちょっと名前出すのは申し訳ないですけども、当時厚生省なんかへ行ったんですね。そしたら、私はボランティアだったんですよ。佐々木さんもいらっしゃいますけれども、障がい者の国際大会で国際アビリンピックっていう障がい者の技能オリンピックがあったんです。それ日本赤十字の国際ボランティアになりまして、学生のとく触れ合ったんですね。自分なりの理想があったんです。もし厚生省に行ったらこういうことをやりたいなと思っていたことがあったんですけども、行ってみたらその会ってくれた先輩がたと話をしていますと、どうも合わないんですね。予算がどうだとか、「大蔵省がこれは認めんでしょう」とか、いろんなところを言うわけです。これ、やっぱりこんなことじゃやっぱりだめだなと思って、ちょっとそこは思ったんですね。

そのときに、私が就職した先の自治省というところは、ちょうど県庁みたいなところでありまして、現場主義なんですよね。それで、現場に出て住民の皆さんとこんなことをやりましたとか、県庁の中に入ってこういうような政策を作って、そしたらこういう喜びの声があったとか、本当に目の前にこう見えるような話を聞かされたんですよ。ここなら自分の一生を預けてもいいかなと思ってふらふらと内定されるままに入っちゃったんですね。そんなようなことがありました。

最初に兵庫県庁というところに赴任しました。ちょうど皆さんぐらいの年頃のときです。2年間、兵庫県庁というところに勤めまして、そこからまた東京の役所の方に帰るということになったんです。その神戸でも、私はボランティア活動の一端をやっておりまして、手話が分からないものですから、手話通訳じゃないんですが、ボランティア用の手話の教室がありましてね、そういうところに通っていたんです、仕事が終わった後に。そしたら、帰るということになりましてね、新神戸の駅、見送りが来るとは思わなかったんです。それで、行ってみると、ホームいっぱいの人ばかりなんです。誰かハネムーンかなと思ったら、皆自分の知った人が結構いるんですよ。いつも通っていた飲み屋のおばちゃんがいったり、どうでもいいことですが、それから職場の仲間がいったりね、実はあんまり人に言っていなかったんです。いつの新幹線に乗るかなんて言うはずもないわけでありましてね、ただ、職場で聞かれたことだけは覚えています。「何時の新幹線に乗るの」って言われて、「この時間に行きます」と言ったら、そしたら職場の皆さん来てくれてホームにいっぱいの人でした。皆、当時皆さんぐらいの年齢ですから、腹も空かしているだろうと、皆さん考えること一緒に、夕飯時だったもので、弁当を持ってきてくれたんですよ。弁当が5つぐらいもありまして、駅便。これどうしようかなと、そういうときに、自分の車両に乗り込むわけですよ、当然それは普通車ですよ、指定席で良かったんですよ、自由席でなくてまだ。そしたら後で「平井ちゃん、ああいうときはグリーン車を取っておくもんだ」とか言われて、そういうもんかなと思っただけなんですけども、そういうようにして送り出されたんです。

そのときに、一番泣けたなと思いました。まさにこう涙が流れてきたし、今も目が潤むんですけども、そのときに手話を通じて知ったんでしょうね。耳の聞こえない方もいらっしたんですよ。もしその人に平井が帰るという話が届くとしたら、何人か間に入って話を伝えてもらわなきゃあり得ないわけですよ。そうやって自分がしてきたこと、自分がここで暮らしてきたこと、それが評価されたというのは、ほんとに嬉しかったです。皆さん、これからいろんなことがあると思うんですよ、それぞれの人生、選択した人生ですから、その中で出会いがあったり、いろいろとトラブルがあるかもしれませんが、そうやって、どっかでね、評価してくれる人がいる、そんなすばらしい職場だと思います。ですから、皆さんも人生を全うして楽しんでもらいたいと思います。ただ、そのためには情熱を持って相手に訴えかける、人の心を掴むぐらいのことをこれから成長する中でぜひ覚えてもらいたいと思います。人間として成長することが公務員として成長することにもなると思います。

今日は皆さんの方にレジュメをお配りしています。ざっとした話も若干させてもらいますが、今、どんどんですね、パラダイムシフト、実は世の中変わっているんです。東日本大震災がありました。あれで皆びっくらこいたわけですね、こんなひどいことがあるもんだ、2万人の命が失われたわけです。その中で、私たち鳥取県は、鳥取県西部地震というのが平成12年10月6日にあった経験があります。あのとき全国の皆さんに助けてもらったんです。だから、我々も頑張ろうと、それで、実は宮城県には河北新報というローカル紙があります。そのローカルのニューズペーパーの中で、新聞紙で、社説で鳥取県の支援物資が全国で一番早く届いたというふうに出ていました。これは向こうの宮城県の村井知事と仲がいいんですね、私。だいたい同い年、向こうが1つ上かな、知事仲間なんですけども、今、宮城県、非常に震災で有名になっちゃったもんで

すから、彼も顔が売れてきたんで、テレビなんかによく出てくる。この間一緒に食事して、いろいろ今の状況なんか話し合ったときに、こぼしてはいたけども、「困るんだよな」と言っていましたね、有名税だと思っただけですけども、ヤフーで検索をするんだそうです。それで、そうすると、ヤフーの中に質問箱みたいなコーナーがありますね、Q&Aのベストアンサーというやつが、それでよくできましたと花丸が付く、よくできたと、答案にはね。そこにQ、問立てがあったんだそうです、「宮城県村井嘉浩知事はズラだと思うかどうか」アンサー、ベストアンサー、「そのとおりです。髪の毛を見れば分かります」本人真っ赤になって怒ってはいたけども、「嘘だろ、見てみる」いかげんなもんでね、それで当時は、今、大分あれしましたが、当時は村井嘉浩と検索をするとズラと出ていましたよ。ちなみに私も車椅子乗ったことがありますね、選挙運動したときに、ちょうどそのときに疲労骨折で足が折れてしまっていて、それで、やっぱり松葉杖ついたり、車椅子で議会に出たりしたんです。今でもそうかもしれない、平井伸治と検索すると車椅子出てきます。そんなようなことがございましてね、そういうように、村井君というのがいるんですけども、村井君と仲がいいもんですから、困ったことがあったら、すぐに助けにいくという話をして、電話をするそばから用意はしていたもんですから、一番早くこの物資が着いたんですね。

それで、実は鳥取県庁からも、ずっと避難所の守をする人を送り出していました。やっぱり助け合うべきときには助け合わなければならない、これを震災が教えてくれたと思います。これが行政のスタイルだとか、それからボランティア活動だとか、そういうところにも大きな影響を与えたと思いますし。原子力発電だとか、津波等の災害に対する意識も大きく変わるきっかけになったと思います。また、環境の世紀ということが言われます。これは原発事故もある、大きいのもかもしれません。安全・安心に対するプレミアムが付いてきたんですね、これ鳥取県にとっていいかもしれない、例えば、食べ物の話、食のみやこと我々言っていますけども、農林水産物が豊富にある。このブランド価値が高まっている、例えば東京のアンテナショップがあります。それで、こういうところで売れるもののトレンド変わってくるわけですね、最初のうちはふるしきまんじゅうだとか、打吹公園だんごみたいな、結構売っていたんですよ。だから、最近は生鮮野菜、これも売れるんですね。それで、お米なんかも、実は大きな袋で最初は持って行って、東京で売ろうとしたんですね、そしたら、皆さん、通勤はするもんですから、そう大きな袋は重たいから買わない。だから、小売にして、2kg袋とか、そういうので売らざるようになっていたんですけども、最近は大袋が売れる、そういうようにプレミアムがついて来ているということはあるのかもしれない。また緑豊かなところで暮らしてみたいという移住のニーズも高まってくる、このようになるのもかもしれません。産業構造がどんどん変わってくる、海外へ製造業とか流出をしていく、ここ鳥取も実はこれに苦しんでいるんです。だから、これから産業構造変えていかなきゃならない。従来の三洋電機等によるピラミッド構造から脱却をしなきゃいけないですよ、いい技術を持った会社はいっぱいあるんです。それを、LEDを作るとか、電気自動車を作るとか、そうした新しいところに向けていく、あるいは太陽光発電のようなそういうものをもっと増やしていく、こんなようにしていったらいい、農林水産業との連携事業をやった、これを増やすことが必要になると思います。

また、こう低成長期に入っていますから、かつてのように、ものさえ作っていけばどんどん経済が良くなった時代はもう終わってきて、限界が出てきているわけですね、そういうことになる、教員だとか、あるいは福祉だとか、そういうサービス産業が大事になってくるんです。日本が高度成長期、世界の工場と言われたときに、ヨーロッパは別のことを始めたんですね、それが福祉、社会福祉の福祉国家を形成されたんです。だから、北欧の方だとかにいきますと、雇用の大きなところはそういうサービス産業が持っている、そこでGDPが伸びていっているんですね、それで、日本も多かれ少なかれ、そういうふうに変わってこなきゃいけないわけですし、鳥取県は少子高齢化が進んでいるということは、その最先端の技術を持ち得るということです。現実にも鳥取県は社会福祉法人、今、東京とかに進出をしているわけですよ、鳥取で培った高齢者ケアのノウハウなんかを向こうに持ちこんで、向こうで評価をされています。保育所なんかもそうですね、こんなことをやれるような時代に変わってきている。ただ、そこにまだなかなか人々の頭の中や行動が移ってきていないのかもしれないかもしれません。その一方で、残念ながら、人口減が起ってきて、地域の衰退が進んでいるわけです。4月1日現在の人口というのは、まだ発表されていませんが、おそらく58万人切ってくると思います。さらに今、厚生労働省の人口問題研究所の推計で言えば、平成42年には50万人を切って49万人、さらに平成52年には44万人というようになると言われています。そうすると、中山間地域などで、もうお年寄りばかりいるようなところがもう出て来ているわけですね、限界集落だとか、小規模高齢者集落とよく言われるところです。こうしたところは、その頃になりますと、皆いなくなっちゃっている、現実にそういうことが起こり始めているわけですね。

じゃあ、どうやってこういうところを元気にしたらいいのか、この辺が課題になってきます。これはまちなかもそうなんです。この辺もそうですよね、実は住んでいるようで住んでない家がいっぱい出て来ているんです。それで、住んでおられるのも、もう皆さんぐらいの世代は外に出てしまって、おじいちゃん、おばあちゃんしか住んでいない。だから過疎地と同じことが起きているんですね。10年程前ですけど、米子のまちなかの東倉吉町のところに行ったときに、その状況聞いてみたら、4割、40%の高齢化率だったんです。これは山奥の日南町と同じ水準なんです。そういうことは、だからまちなかも起きてきている、こんなことで我々の新しい共生領域と言いますか。サービスのターゲットというのは変わってきているということですよね。また、市民社会も成熟してきているわけです。さっきボランティアの話をしました。それで、NPOの話もしました。実は1980年から2000年にかけて、この期間はレスター・サローという学者が言っているんですが、市民社会の連帯革命というのが起こったと言われています。我々のような先進国のところでは、社会福祉国家現象が進んでくる、そういう中で支えきれなくなってくる。

ですから、民が担う行政的なサービスというのは増えてくる、そういう意味でNPOとか、ボランティア、こういうものが成熟し始める、同時に途上国で何が起こったかと言いますと、それまでのガバメントトゥガバメント、国から国への助成援助の仕方から、地域への援助の仕方に変わっている、皆さんは何と言うか、NGOというものですよね、ノンガバメントオーガナイゼーション、こういうところが増えてきていて力を貸してくれる、市民社会が成熟していく、この頃東側世界と言われた、社会主義国は崩壊を立て続けにしました。そういうところは国家の崩壊を

したわけでありますが、その国に代わるものとして民の連帯というものが主流になっておる。こうやって世界中で背景は違うんですけども、国民、住民の世界が力を持ってくる、こういう市民社会成熟現象が起きてきたわけです。鳥取県もその最先端を切りつつあるというふうに思います。鳥取県のボランティア率、これは全国屈指なわけです。ちょっと前までトップでしたし、今も4位かなんかですけれども、47都道府県のうちで、大阪とかとそこが違うところなんです。これが我々の底力になれば良い戦いができるんじゃないかなということなんです。

そういう中で県庁のような自治体が力を持つべきだという地方分権という議論があります。この地方分権は中央集権に対するアンチテーゼでありますけれども、何を指すべきものかと言うと、これは、実は前、行政改革ということをして国がやったことがあったんですね、土光臨調ということをやられた時代なんです。そのときにどんどんと強制カットすることを国が考えたときに、それだけでは暮らしが豊かにならない、そこで暮らしを豊かにするための方策を考えたときに、考え出されたのは地方分権というものだったというのがルーツなんです。ちょっとよく分かんないなと思われるかもしれませんが、どういうことかと言いますと、金太郎飴でどこでも同じことをやっていると無駄な発想をするわけですね、それで、変えて、もし現場で住民の皆さんがほんとに必要なものを順位付けてやっていけば少ない経費で、大きな満足が得られる、大きな効果が得られるということになるだろう、それをシステム化するのが地方分権。地方自治体の方に権限を移したり、財源を移したりしたらいいじゃないかという議論なんです。これは国のかたちを変えるということに他ならないわけです。今、道州制の議論が始まっていますが、これは若干まやかしのところがありまして、注意しなきゃいけないと思っています。道州制というのは、元々は中央集権の議論から来ているんですね、道州制という言葉が作られたのは、地方自治体を抑え込むために全国をブロック化して、国の出先機関のところまでまとめてしまうというのが本来道州制の筋道だったんです。

今、ちょっと別のコンテキストですごく語られていますけれども、本来はそういうことになりません。ちょっと注意しなきゃいけない。前回、先般ですね、自民党さんが道州制の基本法案というものの骨子を世の中に出されましたけれども、それを見ますと、真っ先に都道府県を廃止するとかいうことが書いてある。これちょっと考えてみると、中央省庁とか、そういうレベルでも陰謀くさいところがあるんですね、だから、注意しなければいけない。ほんとに道州制をやるんだったらば、連邦国家にして、アメリカとかドイツのように、そこでみんな決められる。住民がきちんと参画できるシステムが必要だと思っています。そういうことでありまして、地方分権というのは暮らしを豊かにするためのものである。そうであれば、何が前提条件なのかということ、1つは、皆さんのような地方公務員、我々の世界、この底力を把握しなきゃいけないということですね。いいサービスを住民の皆さんの思いに応じて提供できる力を伸ばしていく、これが1つの前提なんです。もう1つの大切な前提は、住民の皆さんが私たちの中に入って一緒に意思決定をし、一緒にこれが良いと思うサービスを作り出していく、こういうことでないと、さっき言ったような素晴らしい成果というのは得られないと思うんですよね、住民の満足を得られるというのは、自分たちの思いが通じたサービスが提供されているから満足が得られる、その提供の仕方についても、自分たちの思いが満足できるものだという、そうでないといけないわけです。それは国の法

律に書いてあるから、あるいは国会で決まったことだから、そういうことは実は全然違うんですね。それで、考えてみるとおかしなことって、いっぱいあるわけです。

例えば、鳥取県でもいろんなことをやって、改革をしてきているんですけども、床屋さんとかいうところありますよね。その床屋さんとかそういうところ、必ず遮蔽物があったんですね。チョキチョキ切っているところと、それから待合のところと、間に何か壁のように仕切っている、ああいう法律で規制があったんです。最近そこはちょっと少し緩やかなというように思うんですね。それは規制緩和、鳥取県の方でもやっている面があるんです。事細かにいろんなことが決まっているんですよ、ただ中にナンセンスなことがいっぱいある、補助金行政なんかもそうなんですね、そういうところを変えていかなきゃいけない、住民の皆さまが入っていく、参画をする、それをパートナーシップができて初めていい仕事ができるということなんです。ここがポイントなんだと思います。皆さんが入られる組織はビューロクラシー、官僚と言われる組織です。マックス・ウェーバーという学者が考えた組織です。それは専門化しまして細分化しているんですね、ビューロクラシーのビューロっていうのは部屋ということです。ひとつひとつの部屋に専門家がいて、そこに命令用の系図を作るわけです。チェーン・オブ・コマンドっていうんですが、命令の連鎖っていう構造を作ります。このハイアラーキーの中で1つ号令をかけるとダアっとそれが伝わりまして、専門部隊が最高の仕事をする、これが一番良い組織だということです。ただこれ欠陥があるんですね、その中には結局間の相互の連絡が取れないということ、またユーザーである住民の皆さんとのコミュニケーションの辺がまだ捨象されているんです。

だから、私たちはそういう組織の中で暮らすわけでありまして、どんどん変わっていかざるを得ないし、変わってきているのは今の鳥取県庁だと思っていただければと思います。全国で一番開かれた県庁を目指して、現に情報公開度は、ここナンバーワンを維持しています、ここ数年。前はちょっと違ったんですけどね、急速に今、順位を伸ばして、今ずっと47都道府県の1番を続けております。私も情報公開という点では、ナンバーワンを品質保障をします。有権者の皆さまにも約束をして前回の選挙もやりました。このようなことであります。ですから組織を変えてもっと風通しをよくしていかなきゃいけません。コミュニケーションの仕方も変わってきています。皆さんの世代もそうだと思いますが、今LINEだとか、いろんなコミュニケーション手段ができてきましたね。インターネットの世界というのは便利です。昔であれば稟議とか言っていて、全てもので書いて回すっていう世界です。今でも多くの役所がこれ、やっています、うちは止めました。今は電子決裁で全てシステムの中で決裁をします。一齐に通知をするのも可能ですよね。昔であればコピーをして配ったんでありましようけども、メール1つで全部一齐送信をすればバアと広がっちゃうわけです。これを使うというのは非常に便利なことですし、皆さんもその知恵を真似して分けてもらえればありがたいと思います。ただ、注意しなきゃいけないのは、逆にコミュニケーションが劣化することがあると、1つ言えば相対での話っていうのができませんよね。お年寄りのことだとか、子どもたちのことも考えていただければお分かりになれると思うんですけども、インターネットの世界の中に掲示したからそれで終わりですよっていうふうに絶対に人間の世の中はならないです。

また、良い知恵を出そうと思ったり、良い仕事をしようと思ったら、やっぱり分かりあってチ

ームを組むことが大切なんです。これがインターネットの世界で命令を流せばいいことではない。その辺が私たちまだ下手になりつつあるところがあると思います。この辺はよく考えながらやっ  
ていかなきゃいけない。またインターネットの世界で溢れる情報っていうのはバイアスが結構か  
かっているもんです。これも注意をしなければいけない。そのようなことに心がけながら上手にそ  
れを活かしていくっていうのが、これからの組織のあり方じゃないかなと思います。また、今決  
定のプロセスなんかも、今、電子決裁の話に申し上げましたが、どんなことも合理化をしていけ  
ばいいと思うんですけども、注意しなければいけないのは、やっぱり言うべきことをちゃんと  
いう、いいことを、いい結果を出そうと思ったら、いい発言をして、それでみんなに納得を  
してもらるように自分も組織人として動くことであると思います。ある心理学者の実験がある  
んですね、5人ほどグループを作ります。そのひとりひとりに試験をさせるんですね。それで  
試験をさせてやってみる、3人寄れば文殊の知恵って言いますよね。だからひとりひとりで  
やらせるよりも5人で、チームでまとめて答えを出させた方が点数が良くなる、そのよ  
うに思いがちなんですけど、違うんです、実験結果は。それを5人がまとめて答えを  
出させるのか、ひとりひとりに出させた場合で最高点はひとりひとりに出させた方が  
上に行くんです。それで、平均点よりもちょっと上のところに5人がまとめると話  
がまとまってくる、これが現実なんです。ちょっと考えてもらえば、ああそうかな  
と思うと思います。ことほど左様でありまして、我々小さな鳥取県みたいな県庁で  
最高のパフォーマンスをしようと思うと、みんなと話し合っただけで結論だから、  
それだけで頑張ると実は平均点ぐらいの話かもしれません。やっぱり小さな組織  
ですから、いい仕事をしようと思えば、これはいいと思うものは言う勇気を持って、  
それを組織の中で実現をしていくっていうのが大切だということだと思います。

これまでは議論だとか、形式だとか、先例だとかにとらわれがちだった、そういう役所のあり  
かたを今改めようと、実践、結果、未来志向っていうふうに提案などもきておりますし、  
中で決まってきたこと、今まで規則でやっていること、お役所仕事の体質を改めよう  
というふうにしています。皆さんもぜひ県庁がやっているそういう「カイゼン運動」  
に向かってもらいたいと思います。今年はずっとグリーンウェイというのを、環境  
を大事にした取組みをやりようと考えておりまして、実際にそういう新しい策を取  
ったりしてきています。皆さんもその辺で実践をしていただければありがたいと思  
います。雇用が難しいわけですから、経済の再生を図り、成長を図ろう、そうい  
う雇用を増やそうということを今私たちは取組んでいますし、世界に開かれた鳥取  
県、鳥取県がもし、チャンスがありましたら弥生時代の方に向かっていくんです。弥生  
時代だと妻木晩田遺跡だとか、青谷上寺地遺跡っていう名だたる遺跡がこの辺には  
あるんですね。つまり大陸に近かったからなんです。今表日本って言うって偉そう  
にしている太平洋側っていうのは、アメリカに近いんですね。ものすごく遠いわけ  
です。ですから、冷静に考えて言えばアジアに経済のセンターが来た今日は鳥取  
みたいなところにむしろチャンスがある、それを現実化するためには北東アジア  
へのゲートウェイを我々果たしていくっていうのは視点として大切だと思います。  
また、先程申しましたように地域の絆が暖かくありますから、支え合いによっ  
て何事も乗り越える、健康長寿というのも作り上げていく、さらに人づくりだ  
とかをやったり、子育て、これも今度同盟を作って10県で一緒にやろうかとい  
うことを立ち上げようと考えています。

また、すばらしい自然もありますし、エコツアーだとか、スポーツツアーなんかのいい材料もあります。国際リゾートを目指そうということを考えているところでもあります。そして冒頭申し上げたことでもありますけども、これからの時代を考えたときに、我々頑張らなきゃならないのはパートナー県政だと思っているんです。住民の皆さま、地域のパートナーとして県庁がある、そういう県庁の姿を皆さんそれぞれに実現してもらえればと思います。2月、3月県議会で大議論をしまして、県民参画基本条例っていうのを作りました。それによって、今鳥取県では常設型と言われる住民投票の制度ができたんです。ですから、鳥取県の県民は、全国の県民の中で一番パワフルな県民に制度上なったんです。また、それだけじゃなくて、情報公開だとか、NPOとの連携強化等も含めまして、そういう基本的な考え方を県民参画基本条例の中へ書き込みました。それで、これを今年を元年としてこれからさらに発展させていく、それが鳥取県の変わるべき方向性ではないかなというふうに思っているところなんです。

今日の話をしようと思って考えた中に、谷川俊太郎さんの詩が頭にふっと思い浮かんだわけがあります。「万有引力とは引き合う鼓動の力である、万有引力は引き合う鼓動の力である」こう言っているんですね。「宇宙はひずんでいる、それでみんな求めている、宇宙はどんどん広がっている、それ故みんな不安である、二十億光年の孤独に僕は思わずくしゃみをした」こういう詩なんです。人間っていうのは孤独な存在ですよ、それが結びつく、結びつけようとして、その本性が、それが我々の目指しているパートナー県政の絆の社会ではないかと思います。皆さんもぜひその担い手としてこれから一生かけていい仕事と、いい人生を送っていただきたいというふうに思います、ありがとうございました。